

東京大学 文系

—Part 1—

いしかわ りょうや
石川 稜也さん(文I・駒場東邦)
かわの うしお
川野 潮さん(文I・開成)
さかくら さとる
坂倉 慧さん(文II・駒場東邦)
しょうじ れ お
小路 玲央さん(文II・筑波大附属駒場)

たか た ゆうすけ
高田 悠介さん(文II・東京学芸大附属)
ば ば としき
馬場 俊輝さん(文II・東京学芸大附属)
まつやま そうへい
松山 宗平さん(文II・駒場東邦)
や べ としき
矢部 利樹さん(文I・筑波大附属駒場)

グノの音読には、本当に驚きの効果があります。実は、最初僕は半信半疑でした。でも、何か月も音読を続けていくうちに、「英語のまま読める!」と実感できる瞬間が訪れました。

矢部 利樹さん(文I・筑波大附属駒場)

目次

- 入塾のきっかけ P1
- 学校での評判 P2
- グノーブルの英語 P2
- 英語の勉強法 P4
- グノーブルの数学 P5
- グノーブルの国語 P6
- グノーブルの先生たち P7
- 後輩へのメッセージ P8

※●は、このPDF フルバージョンのみの掲載項目

入塾のきっかけ

川野: そろそろ塾を考えなければいけないと思っていた中3の冬頃、お勧めの塾を先輩たちに聞いてみたのです。中でも、長谷川先輩*の「グノーブルが最高だった」という言葉に説得力があって、先輩が絶賛する先生方に教わりたいとグノへの入塾を決意しました。

※長谷川哲也さん。開成出身、東大文II進学。Gno-let vol. 11「7期生合格者インタビュー」にご参加いただきました。

石川: 僕は中学受験のとき、当時の東大生に勉強を見てもらっていました。その先生がグノの卒業生で、「大学受験塾の中でもグノは特にいいよ」と教えていただいたのがきっかけで、スタートダッシュ講座に参加しました。すぐに気に入ってまず英語で入り、数学と国語も高校になってから入りました。

馬場: 僕の場合は友達のお兄さんから「一番いい英語塾」とグノを勧められました。高校受験が終わってすぐに受けたフレッシュャーズ講座*で、先生に熱意を感じて授業が楽しかったのですぐに通い始めました。

※新高1生対象の春期講習。

坂倉: グノにした理由は、駒東生の優秀な人が多かったのと、当時部活が忙しかったので、振替ができるシステムというのも魅力でした。高1の春からで、英語と古文でグノに通いました。

矢部: 僕も高1の春から英語と数学で通っていました。当時は勉強をサボっていたので、「このままじゃやばいな」と思って塾を探していたのです。予備校にも顔を出しましたが、大人数授業に魅力を感じませんでした。1対1対応で教えてくれるグノに心惹かれました。グノの先生は僕たちに親身になってくれます。先生との距離の近さが自分の成長につながっていると思えて、グノで3年間頑張れました。

小路: 筑駒では高校入試を内部で受けるのですが、そのとき「英語力が足りない」と実感しました。大学入試まで3年しかないという焦りもありました。そこで、自分なり



矢部 利樹さん(文I・筑波大附属駒場)



石川 稜也さん(文I・駒場東邦)

に調べた上で、「英語に強い」という評判と振替制度のあるグノに決め、高1から通いました。僕はバスケ部と生物部に所属していて、バスケ部は大会前に忙しいし、生物部は文化祭前に忙しいので、学校に近い立地条件もグノの長所だと思いました。

高田: 高1の頃に通っていた塾では、大量の宿題をこなせなかったし、部活の後で行くと授業中に寝てしまうこともありました。「塾を変えた方がいいのでは？」という親のアドバイスもあり、高2の7月から評判の高いグノに転塾しました。グノでは宿題の量が適量で、振替制度もあって、部活との両立に最適でした。

グノの先生が僕たち一人ひとりを見てくれているのは、名前の呼び方にも表れていると思っています。僕の名前は「タカタ」で濁りませんが、前の塾ではいつも「タカダ」と呼ばれていて、僕も訂正するのは面倒なのでそのままにしていました。グノではどの先生も最初から正しく呼んでくれました。

松山: 僕は高2から文系に決めていました。そこで、「自分でできる」とか「いつでもできる」と後回しにしがちな古文をグノで本格的に勉強しました。

グノの古文は高1と高2の合同です。石川君や坂倉君のような駒東の上位層が高1から古文に通っていて、「グノの古文はとても楽しい」という情報は既に耳にしていました。その評判がグノに入塾する決め手でした。

高2の冬にはサッカー部を引退したので、数学も通い始めました。

学校での評判

松山: 駒東では、高校生になると「どこの塾に行く？」という塾トークが頻繁にあります。そのときすぐに名前の挙がる塾がグノでした。同級生からグノの評判をたくさん聞きました。

高田: 学芸大附属では、高3になったときにグノ生が急増しました。「グノに通っている」というと、「英語ができる」というイメージで周りの人たちからは見られました。

小路: 筑駒ではグノ生が一定数いて、英語と国語を受講している人たちが特に多かったです。僕たちは普段受験の話をあまりしませんが、グノの評判はよく耳にしました。

矢部: 筑駒ではグノの英語は本当に人気で、「グノの英語はいいよ」という話をずいぶん聞きました。グノに通っている人たちは実際に英語ができていましたね。僕は「英語だけでなく数学もいい」と思っていましたけど（笑）。

川野: 僕もグノの数学がいいと強く言っておきたいと思います。開成でも「英語のグノ」と言われていますし、実際グノの英語はとてもいいと思いますが、グノの素晴らしい数学が隠れてしまうのはとても残念です。

坂倉: 駒東では中1と中2で年1回、中3から年2回、学校内で実力試験があって順位が発表されます。上位層にはグノの生徒がかなりいました。英語だけでなく、グノの数学に通っている人たちも成績をどんどん伸ばしていました。

馬場: 僕も「グノの英語がいいらしい」と評判を聞いていました。一方で、国語や数学に通っている人たちも「グノはいい」と絶賛していて、グノにはきつとどの科目にも共通する指導方針が貫かれているんだろうと思っていました。

石川: 確かに、成績上位者にはグノ生が多くて、「グノは強い」というのが共通認識でした。生徒だけでなく、先生の中にもグノを高く評価している先生がいました。担任の先生に「グノに通っています」と話したら、「グノーブルの授業は僕も好きです」とその先生がおっしゃっていました。学校の先生にも好かれる塾は珍しいと思います。グノ生は、授業中に内職して宿題をするということもありませんし、学校の行事にも一生懸命取り組んでいるという面もあると思います。

グノーブルの英語

川野: 市販の単語帳を使わないことがグノらしさです。単語帳を持っている人たちは必死に単語を暗記しようと頑張っていますが、あれをやろうとすると勉強自体が辛くなってしまいます。



川野 潮さん(文Ⅰ・開成)



坂倉 慧さん(文Ⅱ・駒場東邦)

グノでも英単語の暗記は必要ですが、興味が自然に湧くとか覚えやすくなるという点で、勉強の質が大きく違います。授業中に、語源からさまざまな単語を派生させていく解説を目の当たりにすれば、誰でも目からウロコが落ちると思います。

馬場:先生が体を使って単語のイメージを見せてくれることもよくあります。“take”のような単純な動詞でも、その動きを先生がやって見せてくれたら根本的なイメージがすぐにつかめます。“surprise”の説明も、「上から」という意味の“sur”と「つかむ」という意味の“prise”で、「不意に上から頭をつかまれてびっくり」だと教われれば面白いし印象にも残り、ときには感動だってします。

石川:グノらしさといえば、1回の授業でものすごく大量の英文に触れられることがあります。しかも、提供される英文は、何年も前の古い話題じゃなくて、ここ1週間くらいの面白いニュースを含め、思わず引き込まれるものばかりです。中東の難民や移民のことも、世間で話題になりはじめていたときに教材になって、僕もちょうど注目していたので、そのタイミングの良さにちょっと感動でした。毎回知的好奇心を刺激されていました。

川野:普段からグノの教材で慣れているから、英語で情報を知ることには抵抗がなくなります。パリでテロが起こったときにも、登校したらみんなが「テロだ」と騒いでいました。そのとき僕は海外のサイトで、躊躇なく英語のニュースに踏み込みました。みんなが日本のメディアで情報を収集している中で、少し優越感を抱きながら英語のサイトを読んでいました(笑)。

坂倉:英文の予備知識や背景にある文化まで先生が丁寧に解説してくれます。「余談かな?」と思う知識も、実は英文の理解にとっても役立つのです。難解な英文も、先生がかみ砕いて教えてくれると途端に興味深いものになって、教養まで身につく感じです。グノの理念でもある「知の力」を鍛えてもらっているのを実感していました。

高田:教材の英文が自然科学や社会学などのさまざまな分野にわたっていて、英語をツールにしてその分野を学んでいるイメージがありました。僕は、授業で学んだことを親によく話していました。親もグノの授業に興味津々で、熱心に話を聞いてくれました。そうやって親に説明することで、僕自身も英文の内容が記憶に刻まれました。授業内で演習、すぐに添削してもらえて、直後に解説という授業スタイルも学習効果が高かったです。宿題の解説を聞くのではなく、その場で解いた問題の分からないところがすぐに解決できたからです。

小路:その場で添削していただけると、先生のコメントをすぐに確認できて自分の問題点を把握できるし、解説を聞くときにも集中できます。

松山:他塾の場合、宿題が多く、それを解いていかないと授業を受けても意味がないスタイルなので、宿題に追われて大変です。「グノの英語は宿題が少ないのに、どうしてそんなに成績が伸びていくの?」と疑問が湧くミステリアスなスタイルです(笑)。

矢部:復習中心で実力を上げられるのがグノの特長です。復習といっても、授業で扱った英文を家で何度も音読することが中心で、それならベッドに寝転がりながらも意味があるので取り組みやすいし、授業中に先生の印象的な解説を聞いているので、授業を再現するのが容易で知識の定着もはかどります。

グノの音読には、本当に驚きの効果があります。実は、最初僕は半信半疑でした。でも、何か月も音読を続けていくうちに、「英語のまま読める!」と実感できる瞬間が訪れました。

小路:最新の時事ネタに英語に触れられるので知的好奇心が満たされるし、そこで使われている英単語を身につけるので、生きた使い方に触れながら自然に語彙を増やせます。市販の単語帳を使う必要がないので、その時間が省けて、他科目の勉強に力を入れられました。

グノの英語は、本質を効果的に学ぶことができるよう考えられた合理的な指導方針をとっていると思います。



小路 玲央さん(文Ⅱ・筑波大附属駒場)



高田 悠介さん(文Ⅱ・東京学芸大附属)

英語の勉強法

石川:高2の3月に東大の問題を解くまでは、「僕は英語が得意だから、東大の英語もある程度解けるだろう」と思っていました。でも、実際に東大の問題を解いてみると、文章量が多いし、難易度は高いし、「こんなのどうやって解くの?」とショックでした。

自信を打ち砕かれて、高3からは音読にしっかり取り組みました。朝起きて必ず1時間半ぐらい音読していました。

「英文を返り読みせずに、前から文意を取っていくのがいい」という話は学校の先生からも聞いていましたから、グノの勉強法は間違いないと確信を持ってやっているうちに、読むスピードも格段に上がり、高い難度の東大の問題にも対応できるようになりました。

馬場:実は、高2の冬頃まで音読をしていなくて、そうしたらクラスがいくつも落ちてしまいました。知識を頭に入れていくだけの復習ではグノに通っている周りの人とは差ができてしまうのだと危機感を抱き、やっと音読をコンスタントにやるようになり、確かに成果はあったのですが、高3の夏に受けた東大模試では英語の点数がいまいちでした。先生に相談したところ、僕の音読のよくない点を的確に指摘してくださいました。その頃からは少しでも気になったらちゃんと質問をして解決するようになり、多分、その相乗効果でさらに英語を伸ばせたのだと思います。

坂倉:僕も、高2の冬まで音読の効果を信じられず、全く音読していませんでした。グノの場合、GSLという音声教材はネットで毎週ダウンロードすることになっていますが、以前はそれさえやってなかったのでやり方も分からず(笑)、機械に強い友達に教えてもらって始めました。

それからは、受験の翌日まで一日も欠かさず音読を継続しましたが、最初は全然読めなくて、時間もかかり本当に苦痛でした。3、4か月の間は、音読の効果を実感できませんでした。親に聞かれるのが恥ずかしくて、7時半に登校して音読するという苦労もしましたが、グノを信じてひたすら続けました。そのうちにどの英文もすらすら読めるようになってきて、そうなると、読むこと自体が楽しくなり、高3の夏くらいには成績も飛躍的に伸びました。音読は絶対に効果があると断言できます。英語の音に、耳も口も慣れさせたというのは、これから考えても大きな意味があると思います。

矢部:英語は言語なので慣れが必要です。帰国子女の人が英語を使えるようになったのは、海外の生活で慣れたからのはずです。グノの授業でたくさん英文を用意してくれて、書く機会もたくさん与えてくれ、毎回音声教材が用意されて、音読を強く勧められるのも、すべて、英語に慣れるためなのだと思います。

小路:夏休み後の学校の実力テストで、もともと英語が得意じゃなかった僕が学年10位に入れました。間違いなく、夏休みに音読を中心とした読み込みをやった成果だと思います。過去に授業で扱った英文を引っ張り出して、何度も読み込みました。「音読でつかえてしまうのは、英文を理解できていないから」と先生がおっしゃっていたので、すらすら読めるまで徹底的に繰り返していました。

夏に頑張った成果は、試験の成績以外にも表れました。フィギュアスケートが好きなのですが、英語版の記事を読んだり、英語で実況を聞いたりしても、いつの間にか理解できるようになっていました。

高田:やり方で気を付けなくてはいけないことがあると思います。英語の音をただまねて喋っているだけでは効果が出ないということです。内容をしっかり理解しながら声に出して初めて効果が出ます。

僕の場合、高3の6月頃までは、GSLを聴いてシャドーイングをするとき、聞こえてくる音をただまねていました。そのやり方で成績が上がらなかった所以先生に相談して、やり方を工夫しました。

正しく言えているかどうかは、親に英文を見てチェックしてもらい、自分は内容を意識して英語を話していく感覚に集中するようにしました。



馬場 俊輝さん(文Ⅱ・東京学芸大附属)



松山 宗平さん(文Ⅱ・駒場東邦)

長い英文を音読して復習するときは、「つかえるのは理解できていないから」という話を僕も思い返し、途中でつかえたら絶対最初に戻るというノルマを自分に課しました。こんな工夫で、英語の成績が着実に上がって安定しました。

グノーブルの数学

松山: 高3のカリキュラムになって最初のⅠAⅡBの授業を受けたとき、先生が無言で板書を始めたのには、びっくりすると同時にとまどいました。周りではみんな一生懸命板書を写していたので、僕もひたすら写しました。それが20分くらい続いたのです(笑)。

あとで話を聞いて納得しました。前期では、先生が板書を通して数学を一般化して、僕たちは練習問題を通して武器や技術を手に入れていくのです。後期では、テスト演習を繰り返すことで、その武器や技術を自在に使えるようにしていきます。この授業構成を知ったとき、「この数学の授業は当たりだな、グノに入って良かった!」と嬉しくなりました。

これまでの数学は、目の前の問題を解くのが前提で、個別の問題の解き方は分かっていても、一般化されることのない教科でした。グノの数学で俯瞰的な目を持てるようになりました。

中でもグノらしさを感じたのは、テスト演習後の反省シートでした。このシートには、「なぜ解けなかったのか?」を自分で書く「敗因分析」の欄があります。自分の弱点を文字に書き起こすことで、「二度と同じ轍は踏まない!」と自分に深く刻まれるものがあり、数学の復習法が大きく変わりました。

初めのうちは反省シートが書けませんでした。でも、回を重ねるごとに反省シートも書きやすくなり、同時に成長を実感できました。「このルートではなく別のルートを選んでいたらもっとスムーズに解けたはず」ということが自分でも分かって反省シートに書けるようになるにつれて、数学の楽しさに引き込まれるようにもなりました。

矢部: 板書は本当に大切です。言ってみれば、この板書の蓄積がバイブル的な存在になって、すべての授業がこの板書を軸に連動していきます。授業が進むと以前の内容を振り返ることが多くなってきますし、さまざまな知識がこれを軸に定着していくのだと思います。

反省シートを使った自己分析も役立ちました。反省を積み重ねると、本番で窮地に立たされたときにも、時間内に反省して正答のルートに辿り着けるようになります。

グノの数学は、付け焼刃的な数学ではなく、根底から理論的に積み上げていく数学です。理解するのに時間はかかりますが、きちんと取り組んでいけば、どんなコンディションでもある程度の答案を仕上げられる実力を培えます。

高田: 僕は先生の理想に全然達していませんでした。宿題は毎回10題ですが、丸をつけられるものはほとんどないというレベルでした。4月から12月までは授業を受けるのが精いっぱい。復習まで手が回らず、受験期になってやっと復習できるようになって、それで、数学も少しは成長したかもしれません。数学が苦手な僕が本番では3完できたので感謝しています。

坂倉: 僕は、学校の数学には全く苦手意識を持っていませんでしたが、高2でグノの授業を受けて、毎回山の高さに圧倒される思いばかり味わっていました。宿題の10題も、1週間を数学だけに費やして、悩み抜いてもそれでも分からない問題があって、それで授業に出て先生の解説を聞くと、自分の力不足に向き合わされてまたショックを受けていました。でも、理論だった説明には毎回インパクトがありました。そのインパクトとともに、問題に対してのルートの取り方も記憶に刻まれました。

グノの授業に圧倒されたりショックを受けたりというのは、多分先輩たちも同じ経験をしていたはずで、そういう道を辿って着実に数学を伸ばせたのですから、僕も先生を信じて、途中で投げ出しませんでした。

板書ノートに関して言うと、絶大な効果があります。板書ノートで自分が丸ごと理



石川 稜也さん(文Ⅰ・駒場東邦)



川野 潮さん(文Ⅰ・開成)

解できた分野は敵なしになります。

具体的な復習方法ですが、僕は計算ミスがそんなにひどくなかったので、問題の解答を隠して、アプローチだけ決めてそれが正しければ終わりにしました。時短ですみません（笑）。

石川: 数学が苦手な僕は、高1のとき学校の定期試験で20点台をとってしまって、「これはやばい!」と思ってグノに入りました。苦手な科目は好きにはなれないのが普通ですが、グノの授業で僕は数学好きになりました。

僕は、小学生の頃通っていた塾で、「できないなら帰きなさい」と算数の先生に言われた経験がありました。それ以降、数学の先生にも恐怖心を抱いていました。でも、グノの先生は、明るく優しく接してくださるので、僕は、「何でこんなに数学が楽しいのだろう?」と思えるようになりました。授業に通って宿題をやっていたら一段成績が上がって、学校の実力試験で順位表に載ったこともありました。

でも、高2では僕には歯が立たない難問に次々あたり、「ちょっと伸びた気になっていただけど、全然ダメだ」と悲しくなりました（笑）。

板書ノートを見直ししながら、過去に解けなかった問題の敗因と打開策をまとめていたら、高3の春に、「すごく伸びてない?」と友達から言われたこともありました。ところがその後、体育祭で勉強に時間を割けなくなった後では、また「あれ?」となりました（笑）。

難しい宿題も解いている川野君と矢部君には、「この人たちがいい。この人たちがみたいになりたい」と憧れを抱いていました。二人を目標に数学を勉強し続けたら、秋のテスト演習で成果が表れ始め、難しいと評判だった年度の東大の過去問を解いても、難しくないと感じられて、僕は自分の成長に少し自信を持てるようになりました。やはり、勉強法としては、板書ノートを軸に敗因と打開策をまとめ続けたことが良かったと思います。そして、いい先生といいライバルに恵まれた環境にも感謝しています。

川野: 僕はもともと算数も数学も好きでしたが、グノに入ってから好きになりました。受験学年になっても勉強は数学中心で、東大の過去問も「楽しい」と思いながら延々と解いていました。

高3前期の板書も、僕は最初からまじめにノートをとっていましたが、途中からは、そのまま写すのではなく自分で消化しながら、というやり方をしていました。解けなかった問題に対しては、自分で考えたことや、先生の解説を自分なりにまとめて書き足していたので、そこが万全なら本番でも確実に得点できるという確信を持って、本番前日はその板書ノートをエンドレスで見返していました。

板書ノートに文字化された戦略、もっと言えば、個々の問題から昇華された戦略は、入試本番でも大いに活用できました。

松山: 書店に並ぶ数学の参考書は、一対一対応の問題集や公式暗記集ばかりです。でも東大はそういう典型問題を出しません。東大は、受験生が初見の問題をどう解くかを見たいのですから、市販の参考書をやっていても勝てません。だからこそ、グノのやり方が有効なのです。

グノーブルの国語

松山: 高2で古文、高3で東大国語を受講しました。常に笑いの絶えない授業でした。先生は生徒を当てるスタイルですが、間違っても重い空気にならないし、恥ずかしくありません。塾は勉強しに行く場所なので、多少の苦痛や憂鬱感があるのは当たり前だと思いますが、グノの国語は、苦痛どころか、むしろ毎週楽しみでした。

古文では、読解重視の面白い文をたくさん読むことができ、昔の人の価値観に触れてワクワクしていました。

東大国語で扱われる難しい評論の中には、話の内容が全く理解できないものもあります。でも、先生が分かりやすい話にたとえて説明してくださったので、いつもすっきりできました。難解なものを具体的な事柄に置き換えて考えてみる姿勢は、教養を



坂倉 慧さん(文Ⅱ・駒場東邦)



小路 玲央さん(文Ⅱ・筑波大附属駒場)

身につけていく上でもとても参考になりました。

高田:同じく高2で古文、高3で東大国語を受講しました。一番の収穫は「古文は面白い」と思えるようになったことです。これまで、古文に登場する人物に親近感を持ったことなどありませんでしたが、先生が主人公の行動に突っ込みを入れるのを楽しく聞いているうちに、いつのまにか解説に引き込まれていました。

東大国語では、先生の提示する解答がとても参考になりました。模試などでは、模範解答は文学的で、自分には到底書けないものばかりです。でも、グノで示されるものは、論理も分かりやすく普通の言葉で表現されていて、「頑張れば僕でも書ける」と思えて復習しやすかったです。

坂倉:高1の古文、高2の現代文、高3も東大国語と国語はすべて受講していました。国語を伸ばすというよりも、定期的に国語に触れる目的でした。

まず言えるのは、高1の古文で基本的なことを習得できたので後が楽だったことです。古文を早めにマスターしておく、受験勉強が本格化したときに他の科目に時間を割けます。

東大国語では、僕も提示される解答例の明快さに感謝していました。お手本として参考にしやすいということもありますが、客観的な判断がしやすいように採点ポイントが細かく分けてつけられていたので、自分の答案を見直すときの目も養えたと、自分でも点数がつけられたのは安心感にもつながりました。

石川:僕も、高1で古文、高2で現代文、高3で東大国語を取りましたが、早い段階で古文を仕上げておくのは本当にお勧めです。古文単語は1年間の授業で網羅できますが、グノオリジナルの単語帳の特長は単語イメージの欄です。先生も授業中には古文単語のイメージを分かりやすく解説してくださっていました。後でもう一度古文単語を復習しようと思ったときに、イメージがつかめていたので、とてもスムーズでした。

グノブルの先生たち

川野:グノの先生について印象深かったことは二点あります。

まず「私たちは映像授業ができない」という先生方の言葉です。僕が習った3人の先生がほぼ同じことをおっしゃっていましたが、グノの先生は生徒の興味関心や理解度に合わせて授業を変えてくださっているのが、大講義にはないライブ感がありました。

もうひとつは、先生方の柔軟性とカリキュラムの柔軟性です。開成は運動会が盛んで、4月下旬から5月上旬にかけて、僕は授業をいくつかスキップしました。その結果、抜けてしまった部分もあったのですが、英語の授業中には、開成生のために同じ内容を繰り返して説明していただけたことがありました。数学ではカリキュラムをかなり変更して補っていただけました。その柔軟性に本当に感謝しています。

石川:学校のことをグノが尊重してくれるのはありがたかったです。グノの先生は、文化祭や体育祭にも来てくださったり、学校の实力試験の成績も気にしてくださったりと、「学校でも頑張ろう」と僕たちが思える環境を整えてくださいました。

どの先生も質問や相談に親身に応えてくださったのも印象的でした。本当にどの先生も僕たちを大切にしてくださったのは変わりません。直前期には、教科に関わらず丁寧に過去問の添削をしてもらえて感謝しています。

馬場:グノのホームページには、質問や相談があるときのメールアドレスが載っています。高3の秋頃からは毎日のように添削依頼や質問をしていましたが、毎回、先生からはすぐに返信がありました。入試直前には、「本番前で緊張しているので応援メッセージをください」と送ったら、すぐ返信をくださいました。しかも、先生がわざわざ手書きで書いたものを画像にして送ってくださって、これには感激しました。受験の心の支えでした。

坂倉:グノの先生方は、生徒一人ひとりを本当にきちんと見てくださいます。授業中に当てられるときには、こちらの心の中まで見透かされている気になっていました(笑)。授業以外でもよく先生たちと学校での話もしていましたが、とても尊敬できる先生と



高田 悠介さん(文Ⅱ・東京学芸大附属)



馬場 俊輝さん(文Ⅱ・東京学芸大附属)

こういう人間関係が結べる塾は他ではなかなかないと思います。

矢部: 個人授業ではないのに、先生たちが1対1の向き合い方をしてくださっているのが感じられて、とても居心地が良かったです。文化祭が忙し過ぎて休んだ分の添削も、お忙しい中すぐに返却してくださいました。先生の熱意が感じられるからこそ、僕たちももっと頑張ろうという気持ちになります。

小路: 毎回添削をしてもらえて、解説のときにも当ててもらえる授業なので、ほどよい緊張感があって長い授業中もずっと集中できました。

その添削も一人ひとりに向けてコメントが書かれているので、毎回の的確な指摘がためになりました。直前期には英作文の過去問添削がとても助かりました。

でも、特に印象的だったのは、グノの先生方が驚異的な早さで僕たちの名前を覚えてくださったことです。

高田: 先生方の熱意には圧倒されました。他の塾に比べて授業の延長時間が長いのですが、だらだら延ばしているのではなくて、先生たちは大変な熱意で、惜しみもなくたくさん役立つことを伝えてくれるんです。これほど熱心に教えてもらえることに感謝の気持ちで一杯でした。

松山: 僕も先生と生徒の距離が圧倒的に近いと思いました。教科に直接関係のない質問をしても丁寧に応えてもらえたり、それまでの答案や反省シートの内容も先生たちは本当によく覚えていて、その上で相談に乗っていただけたことにちょっと驚いたこともありました。

後輩へのメッセージ

石川: メッセージは二つあります。グノは学校生活を尊重しているので、グノと学校の両方を積極的に活用してほしい、ということです。

それと、何度でも打ちのめされてほしいということです。受験生は、打ちのめされて初めて「もっと頑張ろう」と実感します。僕の場合、英語の授業で扱った英文が難し過ぎて、一問も正解できないときもありました。でも、打ちのめされなければ気づけないことはたくさんあると思います。打ちのめされても大丈夫な環境がグノにはあるので、何度でも打ちのめされて、その経験を受け入れながら前向きに勉強してください。

川野: グノには柔軟性があるとはいえ、学校の行事を言い訳にしないことは大事だと思います。授業に出られるときは頑張って出た方が絶対にいいです。

東大合格のための戦略は一樣ではないと思います。先生や先輩の意見も参考にしながら、自分と向き合って自分に適した戦略を見つけていくことが大切です。

馬場: 受験を楽しむためには友達と競争するのがいいと思います。その点、切磋琢磨できる環境がグノにはありますから、クラスの中にライバルを見つけていくのもいいと思います。悩んだり困ったりしたときは、迷わず先生に相談しましょう。グノの先生は頼りがいがあります。

松山: 僕は、数学の先生に質問に行くのに半年かかりました。それがもったいなかったと反省しています。グノには自分のことを理解してくださっている先生が揃っています。いい意味で先生を利用するようにしてください。

矢部: まずはグノの先生の言葉を信じることです。すぐに結果につながらなくても、音読とか板書ノートのとり方など、本質的なことは続けてみることに意味があります。

自分の足でも歩ける段階になってきたと思えたら、自分なりにアレンジを加えていけばいいと思います。

高田: 惰性で勉強しないということです。1日15時間勉強するという友達もいましたが、勉強で大切なのは時間じゃなくて質だと僕は思っています。

僕は夏休みには文化祭の準備も忙しかったのですが、そういう場合にはスイッチの切り替えが大切です。スイッチが入っているモードで真剣に打ち込めば、どちらも中途半端にはならないと思います。



松山 宗平さん(文Ⅱ・駒場東邦)



矢部 利樹さん(文Ⅰ・筑波大附属駒場)

坂倉:勉強では復習が命だと思っています。特に英語は、過去に読んだ英文を何度も引っ張り出して見直してみると、そのたびに新たな疑問や発見が出てきます。そこを調べたり、考えたり、先生に質問して解決していくと読み方がどんどん深くなります。

小路:東大の文系志望なら、英語をまず固めるべきです。ちなみに、僕は入試本番で英語をミスしましたが、それでも受かりました。グノで頑張れば、合格最低ラインには達するという証明です（笑）。

それから、勉強以外のことも頑張ってください。他のことを切り捨てて受験勉強だけに絞るとつらいし、多くの受験生にとってそんなのは不可能です。だからこそ、グノの柔軟性を利用して、学校行事や遊びなどにも打ち込みながら、総合的に力をつけてください。